

# 笑う・教育学

—微笑・哄笑・苦笑・憫笑・嘲笑するという関わり方とヒトの成熟—

宮澤 康人

## はじめりのはじめり

笑いについて考えたり、書いたりすることは、笑いの本質に背くことなのであろうか。というのも、笑い論を読んで、笑わせてもらった覚えがない。名だたる哲学者のものほど笑えないくらいだ。笑いとは哲学のあいだ、あるいは、笑いとは人間の知の営み一般とのあいだに、相いれないところがあるのだろうか。とりわけ教育学は笑いとは相性が悪いようである。笑いをまともに取り上げることさえ滅多にない。それはなぜだろうか。この問いが、今回の論考を思い立たせた動機の一つである。

個人的な経験であるけれど、大学院生の頃、太田堯さんが、心労から胃を痛めたと聞いて、「先生、落語を聞いてみたらいかがですか」と進言した。自分が胃弱に悩まされていたので同病相憐れむ風の気持ちだったかもしれない。ところが、指導教官の勝田さんから、そんな失礼な事をしてはいかん、と叱られた。“落語なんぞは所詮、江戸町人の低俗な文化ではないか。それを師匠筋に向かって勧めるとはなにごとか”というのが理由であったろう。

確かに、生意気な出過ぎた振る舞いであった。だが僕は、生真面目でどうしようもない、といわれる長野県文化のなかに育ちながら落語は好きだった。幼少のみぎりはラジオで愉しみ、上京してからは寄席に足を運ぶようになった。胃のストレス軽減にききめがあると感じていた。

それに、師範学校では、落語に学べと助言する先生もいたという話も聞いていた。話術だけでなく、信濃教育の生真面目さをなんとかしよう、という狙いであろう。その先生は、長野県外の、もしかすると江戸の町人出自のお方だったのであるまいか。士族の出ではなかったろう。武士は三日に一度片頬を緩ませる程度しか笑ってはならぬという躰けがあったはずである。

そういえば勝田さんの家系は幕府直臣だった。するとこの問題には、武士と町人の間の、さらに言え

ば、維新権力の担い手・薩長武士の文化と江戸の町人美学の対立も絡むことになろう。

しかしそれ以上に、あとでふれる林 達夫が言うように、哲学と笑いの根深い対立もあったように思う。ちなみに、西洋の中世キリスト教文化では、笑いはタブーであり、“イエス・キリストは笑ったか”が神学上の論題になった。ブッダや孔子ははたしてどのように笑ったろうか。

ということで、本稿は、比較教育文化史への一つの試論であり、教育学論でもある。

## I どのように笑うか 多様な笑いの現れ

「笑」という文字を目にしただけで、なんとなく、可笑しみを感じるのは、僕だけではなかろう。文字の姿がどういうわけか笑いを誘うのである。

白川 静の『常用字解』を開いてみると、この文字の象形の元は、「神に仕えて神のお告げを人に告げるみこ（巫女）が両手をあげ、身をくねらせて舞いおどる形。神に訴えようとするとき、笑いながらおどり、神を楽しませようとする様子を笑いといい、「わらう、ほほえむ」の意味となる」とある。

ここに、身体性、神との関わり、エロス性 性愛性、愉しむこと、など、「笑い」の原初的要素とおぼしきものがすでに象形として顔を出しているように思える。日本神話の、あめのうずめの尊の裸おどりを取り囲んで、神々が囁し立てる天岩戸前の情景が連想される。

前田富祺監修『日本語源大辞典』には、「笑う 嗤」の語源説が八つ紹介されている。

最初に、「顔がワラ（散）クル意」（大言海）とある。続いて、「相好が崩れ、破顔する義で、ワルル（破）からか」（大島正建）、そして「口を大きく開く意の、ワル（割）から」（柳田国男）という、表情に注目した類似の説がある。さらに、音声に注目した、「ワイワイ、ワッなどという音声のワに、ラフの活用を添えた語（松屋筆記）」という説がある。語義に注目

するものでは、「エラギイフ（悦虚言）の義。ワラはエラ（嘘）の転。エラ（歛）に通じる」（松岡静雄）。「ワラハ（童）のコビの義か。あるいはヨロコブ（喜）の義か」（和句解）などがある。心理的解釈では「子どもが生まれると人は優しくなり、それが面に表れるところから、ワラウ（童得）の義（柴門和語類集）」がある。笑いはこのように、表情、身体状態、音声、子供・小さきものなどに関わりがあることがわかる。

語源説がこのように多様であるのに照応して、笑いのヴォキャブラリーも実に豊かである。

柴田 武 山田 進編『類語大辞典』は、まず「笑い」を定義して、「うれしさ・楽しさ・おかしさ・満足感などを、高揚した声に出したり顔の表情を崩したりして表す」こととする（この定義が一面的であることは後に明らかにしなければならないが）。そして、動詞の類語だけで64を数えあげる。例えば、微笑む、ほくそ笑む、ほころぶ、緩む、目を細める、相好を崩す、笑い飛ばす、吹き出す、盗み笑い、含み笑い、泣き笑い、照れ笑い、談笑など「定義」に沿うものが並ぶが、ややはみ出す感じがする語も見受けられる。例えば、愛想笑い、追従笑い、薄笑い、苦笑い、失笑、憫笑などは、「楽しさ」や「満足感」の表現といえないだろう。

この辞典に収録されていない語では、とくに「冷笑」「嘲笑」を指摘しておきたい。冷笑も嘲笑も、むしろ「定義」には反する語彙のようにおもわれる。これは、笑いの理論史を振り返るとなずけるように、笑いを定義することの難しさ、笑い現象の複雑さのせいである。だが、この辞典の編者は、笑いを全体的体系的に捉えることを最初からあきらめているらしい。

このように、笑いと言っても、その現れ方は驚くほど多様である。

まず大きく分けると、微笑系と哄笑系となるであろう。山口 翼（編）『日本語シソーラス』は、微笑系には「頬笑む」など、単に漢字表記を変えたに過ぎない類語のほかには「目を細める」という表現を拾っただけなのに対して、哄笑系には、大笑い、高笑、爆笑、豪傑笑い、馬鹿笑い、笑殺、失笑、抱腹絶倒、解頤（顎を開くの意）、腹痛し、そのほか、数十の表現を列挙している。微笑系が少なく哄笑系が多いというこの対照は何を意味するかは、後でじっくり考えなければならない。

同辞典はつづいて、微笑系にも哄笑系にも含まれない、忍び笑い系、苦笑い系、薄笑い系、作り笑い系、嘲笑系の類義語を拾い集めているが、それぞれの笑いの質に違いがあることは誰でもすぐに気づく。この違いは、何を、誰が笑うか、即ち、笑う主体と笑われる対象の関係の在り方の違いに起因するだろう。どのように笑うか、それが笑いの質の違いを生む。この点が後ほど検討の中心テーマとなる。

これまでの大まかな探索だけでも、辞典の編者たちの思考法は、十分にカテゴリカルでないばかりか、ときには混乱しているのではないかと、という疑問が湧くが、笑いの分類論はひとまず置くことにして、ここでは、感情としての笑いの特性を少しさぐっておこう。それには、反対語を調べるのも一方法である。

『反対語大辞典』を引くと、「泣く」と「怒る」が表れる。「泣く」を見ると、「笑う」と「怒る」が出ている。つまり笑うことは、泣くと怒る、の両方に対応する感情と理解されている。となると、感情の三者鼎立関係ともいえる。この三者は、喜怒哀楽という、いわゆる基本的感情の四分類とどう関わるのであろうか。これらの対応、対立関係と笑いの質とはどう関連するのか、これも分析しなくてはならない論点となるだろう。

このように記述していると、たしかに興味はそえられるが、いま現在、ほく自身は、別に、腹を抱えたり、吹き出したりしていない。予想していた通り、笑いを考察し、論じることは、可笑しくもなんともない。まして、この論稿を読む諸賢には、つまらないと感じられるであろう。

もともと、書いて笑わせる人と読んで笑う人の間には、ズレどころか、対立さえあった。両者の落差を語るエピソードには事欠かない。

『東海道中膝栗毛』を愛読したファンの一人が、愉快的旅をしたいと作者の十辺舎一九に同道を懇願したが、一九の気難しい仏頂面のため一日で逃げ出したということである。井上ひさしが笑劇を執筆するときに四苦八苦する姿はよく知られていた。また、不世出の喜劇王チャップリンが書いた、傑作と評判の高い自伝を読んでも、吹き出すような箇所はまずない。むしろ、貧しい母子家庭で飢餓に苦しむ少年時代の記述などには悲哀感が漂う。それどころか、コメディアンに自殺者が多かったことをチャップリン自身が書いている。

ちなみに例外のひとつは、あとで紹介する哲学者土屋賢二のエッセイである。つい吹き出してしまふ。

そこで次に、ヒトはなぜ笑うようになったのか、その生物学的背景と文化的背景を探ってみることにしよう。

## II なぜ笑うか その1) 笑いの自然史

笑いが、ヒトの進化の重要な要因に挙げられることがある。ウォルターの『この6つのおかげで人は進化した』において、「6つ」というのは、サブタイトルによれば、「つま先、親指、のど、笑い、涙、キス」である。但し原著のタイトルは、だいたい違ふ。THUMBS, TOES, AND TEARS And Other Traits That Make Us Humansである。直訳すれば、タイトルは『親指、つま先、そして涙—その他、ヒトを人間に進化させた諸特性—』となるはずだ。笑いは、その他の特性の一つに過ぎなかった。

察するところ、原著者の狙いは、まず「親指」に注目し、それに連携する足の指、そして、涙に代表させた諸情動を重視することである。それを、日本語訳者が前述のように変えたのは、本書全体の論述の流れをより詳しく伝えようとの工夫からでたものであろう。論述の根底にあるのは、現生人類が、直立二足歩行と共に成立したという定説である。

それで本書の第一章は、「足の親指の不思議な物語」として始まる。直立するためには、親指を中心にしたつま先の進化がなくてはならない。第二章は、「立ち上がった者たちの恋の駆け引き」となって、直立したヒトの雌と雄の身体関係が四つ足姿勢とは異なることによって、性愛の在り方が変化するという推定である。続いて、二本足姿勢は手を歩行運動から解放し、手の活動範囲とレベルが飛躍的に高まりその手の刺激が脳の進化に貢献する（三章「発明の母」）。それを受けて第四章は「言語誕生の前夜」となる。次に「のど」の進化があって、他の類人猿では弱い、声の分節化の能力を獲得し、声によるコミュニケーションの複雑化がさらに脳を進化させ、意識の発達とともに、言語の発明に至る。

このように、身体の進化と精神の進化がいつもセットになって語られる。それを受けて、第七章は「言葉、毛づくろい、異性」という項目の下、言語的、身体的コミュニケーションの在り方一般が意味づけられ、その後、笑い、涙、キスについての各論

が三つの章にわたる。即ち「叫び声から笑い声」「涙を流す奇妙な生き物」「唇の言語」である。

笑いは、身体的情動のコミュニケーションの一形態ではあるが、その筆頭に位置づけられている。

八章「叫び声から笑い声へ」は、示唆に満ちた笑いの進化論仮説である。

「笑いは人間の行動のなかでもとりわけ不可思議である。理解しがたく、分析を拒む。それというのも、ひとつには、笑いが私たちの原始的な部分と知的な部分を見事に結びつけるものだからだ」（ウォルター、訳書231）。

「笑いの起源をさかのぼると、太古の昔の非言語的な行動に行きつく。言語が進化するよりはるかに前の時代だ。笑いは遊びや上機嫌に伴うものだが、人は愉快なときにだけ笑うわけではない。怒っているとき、恥ずかしいとき、不安を感じているときなどに、感情を表に出さないために笑いで隠す場合があると、ダーウィンも指摘している」（ウォルター、232）。

「笑いは人と人のあいだに生じるものなので、他者にも伝染する。誰かが声をあげて笑うと、ほぼ間違いなくほかの人も同じようにする」（ウォルター、232）。

「これほどなじみ深く、全世界共通の行動でありながら、なぜ私たちが笑うようになったのかについてはほとんどわかっていない。・・・進化というものが、大きな現実的利益を断固として好むものだとすれば、笑いにどんな目的がありえるであろうか」と考えて、様々な事態を検討するがやはりわからない、と言う（以上ウォルター、232）。

さらにまた、「声を出す笑いが微笑みより先に生まれたのか、その逆なのかもよくわからない。片方はおかしな「音」がし、もう片方はおかしな「顔」になる。なぜそうなったのだろうか」。そういった、笑いの起源を理解するには、ヒトに一番近い霊長類との比較行動学が必要だと著者は言い、それを、ミッシェル・フーコー風に「心の考古学」と呼ぶ（ウォルター、233）。

不明なことだらけとはいふものの、聴覚的笑いと視覚的笑いという知覚領域のちがいがあること、そのほかにも判明していることはある。fMRI（機能的磁気共鳴画像法）を使った研究の結果、今のところ、脳に笑いの中核と呼べるものの存在は確認できないが、笑いに関わるニューロン群はいくつもあ

て、それぞれが決まった仕事をこなしている。例えば、他者が笑うのを見たり聞いたり認識したりする領域もあれば、ドタバタの笑いと洒落を区別する部位もある。こういうところから見て、「笑いは古いものから新しいものへと変化しながら長い時間をかけて進化してきて、脳の新しい部分と古い部分をつないでいると考えられる」という推測を加える(ウォルター、236-237)。

ところで、「笑いは、オランウータンにも、ワライカワセミにも、笑い草にも真似のできない、人間の特技とされます」(中村、3)とある。たしかにこれは、アリストテレスが「ヒト以外に笑う動物はない」(『動物部分論』『全集』8、355)と断言して以来いまだに定説と言っていいであろう。ホモ・サピエンス(現生人類の学名)が、知性をもつのは人間だけ、そして、ホモ・ファール(制作者)が道具を作るのは人間だけ、という人間認識に基づいているように、ホモ・リーデンス(笑う人間)という、ヒトの特徴づけ方もある。

ただし、類人猿のなかにヒトの笑いに似た表情が萌芽的にみられるらしい。それで、笑い(の進化)の系統発生に目を向けた研究もある。例えば、「自発的的微笑の系統発生と個体発生」というタイトルをもつ論文もある。これなど、小生の最近の関心の持ちようからすると、まさしく“我が意を得た”と言いたい研究である。その著者たちの共同研究に『ヒトはなぜ微笑むのか—進化と発達にさぐる微笑の起源』がある。これは、笑いを「自発的的微笑」に絞って問題にした研究書である。

一般的に、育児書には、生後2ヶ月ほどの赤ちゃんは、「話しかけたりすると、赤ちゃんはほほえむでしょう」(スポック)とか、「あやせば笑うようになる」(松田)など、という記述が必ずと言っていいほどでてくるが、「微笑」や「笑い」の定義はなく、微笑と笑いが区別されていない(川上他、9)と育児書を批判したのち、まず微笑を、「唇の端が上がって、鼻のわきにしわができた形が続くこと」(川上他、10)と、極めて客観的、身体的に定義する。その上、「仏像などの微笑や、モナリザの微笑」のような「それらしく見えるものは扱わない」とわざわざ断っている。それに対する「笑い」は「微笑」に「はっはっは」のような声を伴うもの」と、これまた客観的に定義される(川上他、11)。微笑は視覚的、笑いは聴覚的に捉えられているともい

える。ただし、微笑は顔だけの動きだが、笑いは全身の運動である、という対比も後に指摘される(川上他、14)。

微笑について「初めて科学的に意味のある論文を残したといえる」人としてダーウィンの名前が挙げられる。彼は「音笑や微笑においては両頬及び上唇が著しく上げられるゆえに、鼻は短くなるように見え、微量の皮膚には細かな横じわが寄り・・・」といった、客観的な観察をしている、と言う(川上他、12)。本書は上記のように定義した微笑を、エクスマンらが開発した「顔の動きの記述法(FACS Facial Action Coding System)」を使って記述することを課題としている<sup>1)</sup>。

これは、前述の、ヒト進化の6つの要因論仮説をさらに遡って検証する比較行動学的研究である、と言っていいであろう。

例えば「チンパンジーの2つの表情」とヒトの新生児の表情の比較分析を行う。そして、両者に相似の表情を見出す。しかし、この相似は、その方法の自己限定から必然的に、情動と直接対応させることはできないので、その対応を探る方法をあれこれ工夫しつつ、笑いの生物学的基盤と、心理社会的特性を明らかにすることを目指し、微笑と笑いのどちらが先かという問題に一つの仮説を提示する。

この研究のもう一つのポイントは、笑い現象に、「自発的」笑いという限定を加えたところにある。ヒトの笑いがもつ生得的、生理的性格に注目するのである。

このような、客観的な観察法に基づいて、では「微笑」の進化はどこまで遡ることができるか、という問いを設定する。

『ドッグ・スマイル』という写真集があり、愛犬家の多くは犬も笑うと思込んでいる。しかし、犬とヒトの顔の構造が違うので、しわが寄るかどうかなどの同じ物差しは使えない。結論的には、犬の微笑みを認める研究者はいないとのことである。同じく、千葉のシーワールドに「微笑で有名なアシカ」がいるといううわさにも触れ、「アシカとヒトとは顔の構造が違いすぎ」る、それに、「顔の構造だけ」でなく、「認知能力の発達なども考慮」すれば、犬やアシカが、ヒトのような意味で、ほほえむことは考えにくい、という(川上他、21)。

続いてチンパンジーの二つの表情、即ち「静かな、歯をむき出しにした表情」と、「ゆったりと口を開

く表情」が見られること、前者はヒトの微笑に、後者はヒトの笑い（本書の定義による狭義の）につながるという見解が紹介され、いずれも過度の緊張や興奮のはけ口から従来から考えられてきたものにあたと述べ、カントもフロイトも同様だったと言う。やがてそれらは「喜びの表出」と見られ、「微笑は笑いの程度が弱いもの」と、両者は連続性において捉えられた。それに対して、両者の質的差異を主張したのがファン＝ホーフの仮説である。本書の研究はそれに近い、と言う（川上他、22-23）。続く、笑いの進化の二つの流れの検討は省略して、究極のところ、笑いの系統発生はどこまで遡れるかをみてみよう。

「ニホンザルもヒトと同じように自発的微笑をみせるのに、なぜ普段は微笑を見せないのか」という疑問に対して、「ニホンザルはフェイス・トゥ・フェイスでコミュニケーションをとらないためか、快感情を他者に伝達する必要性が小さいため」という推測を下す。見つめ合わないため表情の重要性は低くなり、また、群れの安全を保つためには、「快感情を伝達する」より「不快さや危険性に関わる感情」の伝達の必要性が高い、という理由を付け加える。そして、快感情を微笑で伝え合うコミュニケーションの発生を「しがみつき一抱きしめる」から「見つめ合い一ほほえむ」へという流れでとらえ、それを、500万年前の「ホミノイド」に見る松沢哲郎説を示す表を掲げる（川上他、44-45）。

図表 1 人間の親子関係の進化的基盤（松沢 2005）

起源（推定年）	動物分類群	母子関係の特徴	現生種概数
6500万年前	哺乳類	親が子どもに乳を与える	4500
5000万年前	霊長類	子どもが親にしがみつく	200
3000万年前	狭鼻猿類	親が子どもを抱きしめる	80
500万年前	ホミノイド	みつめあう、微笑みあう	2
200万年前	ホモ属人類	物理的に離れ、声をかけ、手足を動かす	1

結論的には、「微笑み合い」はチンパンジーとヒトにおいて生成するが、それはヒトにおいては、母と乳児の微笑み合いの段階にあたる。さらにヒトでは、「母と子が物理的に離れて生活する」という関係が成り立つようになったことで、「表情や声や手

の動きを介した対面のやりとりの重要性をましたのではないか」という松沢の仮説を紹介している。以下、胎児、新生児、乳児における「微笑」の発達、FACS法に依る観察・記述と情動の関連の記述が続くが省略する。

### III なぜ笑うか その2) 笑いの文化史

以上のような経験・観察科学の方法による知見が有益であることを認めるのを、ためらう必要はなからう。だが、「ほほえみ」だけに絞ると、それと峻別された「笑い」が視野の外に置かれる。それは、方法必然のこととして前提されているのだから構わないが、情動のうち快感（とりわけ穏やかな）に関連する笑いしか視野に入れないことには問題がある。それだと、先に列挙した、苦笑、嘲笑、哄笑のような、穏やかな快感を超える笑いはもとより、窮地に陥った時の狂的な笑いのような、不快の情動に関わるように見えるものには追れない。

ところで、今回、笑いのテーマで文献を漁っているうちに、「笑い学会」なるものが存在することを知った。「ユーモア・サイエンス」という用語もある。脳科学の知見を社会心理学に応用しようとする、「社会脳へのアプローチ」と言う研究もある。

さらに、『笑いの社会学』という著作は、笑い研究の、生物学から社会学への移行を意図し、笑いの統一理論を構築する野心を抱いて、まず笑いの発生に注目する。

「われわれは、通常随意的に〈笑う〉ことはできない。本当に笑うためにはなんらかの機因、キッカケが必要である。十分なキッカケが与えられれば、ほとんど自動的にあの〈おかしみ〉とよばれる独特の精神感覚が体験されると同時に、頬筋の緊縮と呼吸筋のリズミカルな収縮を中心とする特有の生理—情動的表出運動、いわゆる〈笑い（laughter）〉が発生する」（木村洋二、11）。

この研究では、笑いのキッカケを、ヒトの認知機能に焦点を定め、情報理論とピアジェの『図式』概念を援用して、とりあえず次のように極めて抽象的に捉える。

「笑いの起動因は〈図式のズレ〉による〈同化の発展〉、つまり両義的もしくは非一義的なパターン認識によって図式の作動が干渉をうけ、同化機能にある種の振動が生じるところにある」（木村、11）。

これではあまりに抽象的に過ぎると思われても仕

方がないが、統一理論を目指す限り、こうなるのは必定であろう。とはいえ著者は、この規定に多様なデータを分類して盛り込み、分析して行く。本稿では、その詳細を追うことはしない。

さて、前述のように、顔の筋肉の動き、表情の客観的観察法による結果が示すところでは、サルも笑う。だが、それ以上の、「可笑しさ」の感覚は、「本来高度に精神的な感覚であり、意識内在的な情報現象であると普通みなされている」（木村、31）。ところが、実は、ワライタケ（茸の一種）などに含まれる「ある種のアルカロイドは、強烈な笑い反応を引き起こすと同時に、あのまぎれもない精神的な「おかしみ」の感覚を数時間にわたって」引き起こす（木村、31）。

もう一つ、似たような笑い反射を引き起こす身体刺激に「くすぐり」がある。しかしこちらは、精神的「おかしみ」の感覚を伴わないのが普通である。それゆえ、「くすぐり」刺激は「ワライタケ」刺激より、「下位のレベルで笑いの回路に入力される」と、この研究者の理論においては位置付けられる（木村、33）。

ただし、「くすぐり」刺激も「完全に生理的回路に作用するわけではない」理由として、自己刺激や医師、マッサージ師のような「限定された役割主体による刺劇も同様である」ことを挙げ、「くすぐり」刺激が笑い回路に入力されるためには、その刺激が全体的存在者としての《主体—他者》からもたらされるという精神的な知覚が不可欠であり、したがって、「《笑い》とは文字通り精神と身体との《繋ぎ目》に位置する現象なのだ」という理解が導き出される（以上木村33、傍卓は木村）。つまり、笑いはヒトとヒトとの関係の中で生じる現象である。

このようにして、笑いの探究は、自然史の領域から社会史・文化史の領域に踏み込んでゆく。それとともに、微笑以外の笑い、即ち苦笑、哄笑、嘲笑などが考察の対象として浮上する。すなわち、情動としても、穏やかな快感以外のものも射程内に入ってくる。

先に、キリスト教における笑いの抑圧に言及したが、それはまさしく文化現象である。30年ほど前、イタリアの記号論者ウンベルト・エーコ原作の“薔薇の名前”が映画化され評判になった。アリストテレスの『詩学』の欠本部分とされる“喜劇論”をめぐるミステリーである。

そのテキストを所蔵する北イタリアのベネディクト会修道院を舞台に、次々に謎の殺人事件が起きるというストーリーである。アリストテレスはトーマス神学の哲学的権威である。もし、その『喜劇論』に、笑いが肯定的に論じられていたら、厳粛、深刻を旨とするキリスト教信仰を嘲笑する要因となりかねない。そこで、そのテキストの存在をひたすら隠蔽しようとする動きが大勢であった。

大きな目でみると、キリスト教以前の、いわゆる異教文化には、およそキリスト教の、倫理や美学とはあいられない、エロスと笑いが横溢していた。古代ギリシアの、神殿を中心とした遺跡群には、野外劇場や音楽堂が併設してあるのが普通であった。医神アスクレピオスを祀った神殿には、治療施設や浴場が付属していた。それも珍しいことではなかった、という（学阪9）。2世紀に書かれたパウサニアスの『ギリシア案内記』にも、参詣と湯治の後、喜劇を大笑いして楽しむ人々の姿が描かれている、という。

ちなみに、この種の笑いをギリシア語ではゲラオ（gelao）といい、日本語の「ゲラゲラ」と音韻的に似ていることにこの心理学者は注目する。そして、笑いが横隔膜を揺さぶり、深い呼吸を促し、免疫力を高めることから見て、現代医学が発見した笑いの治癒力に、古代ギリシア人はすでに直感的に気づいていたのではないかと推測している（木村、10）。

ところが、キリスト教文化の支配と共に、笑いは民衆に求められているにもかかわらず、宗教権威によって次第にタブー視されるようになり、イエスキリストは笑うはずがないという言説が正統となった。

前述の“薔薇の名前”の時代が14世紀末、舞台は北イタリアのベネディクト派修道院、事件解明の“探偵役”が外来のフランシスコ会修道士であることには、すべて象徴的意味がある。時はまさしくルネサンスと宗教改革への過渡期であった。文書係の盲目の老修道士が、アリストテレスの手写本をかたくなに秘匿するのは、「笑い」こそ神を疑わせる萌芽となることを恐れていたからである。この危機の予感、やがて16世紀のラブレール、17世紀のモリエール、18世紀のヴォルテールを経て現実化して行く。

これは、神学上の争点にもなった。そのスコラ論議に触れる余裕はないが、現代の神学者はこの問題

に肯定的に應えるようになった。『笑いの神学』と  
いった、一般向けの書物もある。その帯には、「信  
仰とユーモアの関係を徹底的に分析する」、「心から  
笑える人は幸い!!」と謳う。

現代日本のプロテスタントにして政治学者の宮田  
光雄の『キリスト教と笑い』も、当然、笑いにつ  
いて肯定的である。帯には、「イエスは笑ったか？  
〈喜びと解放のメッセージ〉として聖書を読み直  
す」とある。宮田が、このテーマに目を開かれたの  
は「カール・バルトとの出会いによる」ものと明か  
し、1960年代にその最終講義を聞いた時の様子を生  
きいきと描いている。

バルトは、和解論のキリスト教倫理を主題にし  
て語っていた。広くない教室で200人ほどの聴講生  
を前に、「終末論の観点から現代の生きざまを問う  
テーマ自体は、たいへん深刻なはずなのに、教室中  
はバルトのとばすユーモアで絶えず笑いにつつま  
れていた。一時間の講義が笑いの連続といってもよ  
いほどで、全く意表をつかれてしまった」とのこと  
であった。

それと対照的だったのが、続いて聴講したヤス  
パースの講義であった。大きな講堂を満席にした聴  
衆を前に、「厳然と威儀を正して、真摯な口調で「超  
越の暗号」について語った。笑い声はおろか、満場  
の聴衆からは咳払いの声一つ起こらなかった」。さ  
らにもう一つの対照は、バルトは、階段教室だっ  
たので低い位置から学生を見上げるようにして話した  
のに対して、ヤスパースは「一段高い壇上」から「学  
生を見下ろす格好で講義した」ということである  
(宮田、213)。

これを読んでほくは、かねてから、バルトが好き  
で、ヤスパースが嫌い、という殆ど生理的ともい  
える感覚に、人間論的・関係論的根拠を与えられた  
ような気がした。

そういう背景があって、宮田は、キリスト者が笑  
いを知らない、『聖書』には『論語』と同様、ユー  
モアがない、といった一般に流布する常識に挑戦す  
る。確かに、イエスが笑ったという記事は福音書に  
はひとつもない。周囲の人に冗談を言って笑わせた  
という記事もない<sup>2)</sup>。

それに対して、宮田は、福音＝喜びであるという  
原理から、福音を説くイエスの表情は喜びに輝いて  
いたに違いないという確信を導き出し、さらに、弟  
子たちに、ペテロ(岩)とか「雷の子」などのあだ

名をつけるセンス等々の傍証を挙げながら、福音書  
全体に漂うユーモアの雰囲気を示そうとする。

このように、キリスト教においても、笑いはタ  
ブーと見なされなくなったどころか、むしろ人間の  
にも信仰の上でも肯定的に意味づけられる傾向にあ  
る。

しかし問題は、その笑いが、穏やかな喜びの表現  
である微笑みに限られているところにある。前出の  
『ヒトはなぜほほえむのか』が明らかにしたような、  
類人猿に起源をもつ生理現象ともいべき自然な笑  
いの、しかも一面しか視野に入れない。「ほほえみ」  
と区別されたもう一つの笑い、「声に出す(哄笑系  
の)笑い」は依然としていかがわしく、疑いの目  
でみられるか、もしくは無視されたままである。

そうであれば、ラブレ的な哄笑(大勢が大声を  
出す笑い、共同体の笑い)はもとより、辛辣に聖職  
者をも風刺するモリエールの嘲笑、とりわけ、無神  
論的契機を内在させた、ヴォルテールの啓蒙的笑い  
は受け入れようもない。

笑いには、すでにざっと見渡したように、矛盾対  
立さえ含む多様な様態がある。その一部分しか肯定  
的に容認できないのは、キリスト教(もしかしたら  
宗教一般)の本質そのものに基づく限界のためであ  
ろう。この点は改めて熟考に値する。

「微笑み」を視野に入れるだけでは、笑いのもつ  
人間論的意味の広がりや深さは見えない。となれば、  
笑いの教育学的価値を問題にするという課題さえ見  
失われかねない。「微笑み」以外の笑いにこそ  
おそらく、笑いの、人間に独自の社会性、文化性に  
起因する謎が、より深く隠されているのではなか  
ろうか。哄笑 苦笑 憫笑 嘲笑など、いずれも類人  
猿はもとより、哺乳類以前のすべての動物の無表情  
と比べると、明らかに、よくも悪くも人間的に思  
える。その他にも、照れ笑いや追従笑い、忍び笑い  
や泣き笑い、作り笑いや、さらに、いわゆる「無  
意味な」笑いというものもある。

ここで改めて、笑いの多様性を想起し、人間は、  
何故笑うか、何を、誰が、何のために どのよう  
に笑うのか、といった笑いの、要因論、状況論、関係  
論を立ち入って検討しなければならなくなる。

人間は、赤子に微笑むが、嘲笑はしないだろう。  
権力者には、追従笑いか嘲笑はしても、微笑みはし  
ない。弱者に対しては憫笑するか、嘲笑するか、あ  
るいはどちらも抑制するだろう。自分の失態には

苦笑や憫笑はしても、たぶん微笑や哄笑はしない等々、関係、状況に応じて、笑いの様態は異なる。

ここで、問題の広さと深さを測るための一助として、これまでにこねられた笑いの理屈の諸相を探ってみるのも悪くないであろう。

#### IV なぜ笑うか その3) 笑いの理屈

現代の笑い理論の出発点をなすと殆んど誰もが認める、アンリ・ベルクソンの『笑い』という一書がある。その訳者、林 達夫は解説文をこのように始める。

「由来、哲学と喜劇とは甚だ仲がよくなかった。ギリシアのアリストファネスから近代のマーク・トウェンに至るまで、夥しい数の喜劇的作家が哲学と哲学者とを好んで笑いのまどにしてきた。この喜劇の哲学への攻勢に対して、大部分の哲学者は超然たる黙殺をもって、だが、一部の者は侮蔑的な貶位をもって逆襲してきたが、これに全面的な報復を企てたものは十九世紀末までほとんど一人もいなかった。『笑い』(Le rire, 1900)と共に、笑いと喜劇との正式法廷尋問がはじめて行われ、アンリ・ベルクソン(1859-1941)は極めて巧妙かつ懇懇な仕方ですら笑いと喜劇とにその哲学を自白せしめることに成功したのである」(ベルクソン、205)。

ここには、笑いを議論する場がベルクソンと共に設定されたこと、哲学を否定する笑いにも実は「哲学」が隠されていたことが見事に要約されていて、間然するところがない。

しかも林は、翻訳40年後に、ベルクソン以後の笑いの議論について、周到な目配りと行き届いた展望を行った。それからさらに40年、夥しい笑い論の噴出はやむ様子もない。

今や、笑いをまともに論ずるには、先行研究に目配りする十分な時間的余裕と、それ以上に勇気を必要とするだろう。すでにベルクソンと現代との中間期にあって、才気あふれる劇作家マルセル・パニョルが、ベルクソンの理論に異を唱えた時でさえ、「かくも多くの哲学者やモラリストのあとで、笑いについての小冊子を書こうとするのは、向こう見ずな企てであるかもしれない」とへりくだざるをえないほどであった(パニョル、1)。

パニョルは、リュシアン・ファーブルの『笑いと笑う人たち』を、「きわめて注目すべき著作」と認め、その要点を紹介する。

「ベルクソンの理論は結局次のように要約することができる。一方において、生命の幻覚を与えるすべてのもの、他方において、機械的な排列の幻覚を与えるすべてのものは喜劇的である」と。そして、ファーブル自身が最も一般的と自称する理論は、「一方において混乱を引き起こしうるすべてのもの、他方において、その混乱に忽如として手際よく解決を与えるすべてのものは喜劇的である」となる(パニョル、4～5)。

実作者らしい解説ではあるが、笑い論を「喜劇論」に解消しているきらいがある。それゆえ、喜劇と区別されることがある笑劇だけでなく、演劇の外にある笑いが軽視されてしまう。この論点は改めて考えてみなくてはなるまい。

しかもパニョルは、自然界には笑いの源泉はない、笑いはあくまでヒトの世界の現象であるとみなす<sup>3)</sup>。そして源泉は対象にではなく、笑う主体の側にある、と言うが、むしろ対象とヒトとの関係、ヒトとヒトとの関係にある、と言うべきであろう。

そういうわけでパニョルは、これまで優れた哲学者たちが提出した「われわれは何を笑うか」ではなく、「何故笑うか」と問うほうを選ぶ。「何を」は「何故」が分かれば、おのずから分かるものというのが理由である(パニョル、8)。

そしてかれが与える解答は、「笑いはわれわれが他人にたいして忽如として瞬間的な優越感を抱いたときに発生する」というものである(パニョル、166)。

だが、この説は、実はスタンダールが既に披歴していた見方に酷似しており、それはさらに、ホップズの着想にまで遡れる、と訳者の鈴木力衛は指摘し、裏付けとしてスタンダールの「笑いについて」という覚えがきを訳出提示している。ホップズは、近代の笑い理論の創始者に位置づけられることが一般的である。少なくとも、ひとつの系譜の源泉をなすことは確かであろう。

この類の笑いは 先のキリスト教の、喜びの微笑みとは真っ向から対立するが、他方で、ラブレーが描く、ルネッサンス期民衆の共同体的哄笑とも対置されうるだろう。

ベルクソンの笑いは、一見、微笑み、嘲笑、哄笑のうち、どの類にも収まらないように見える。ただしそれが、“可笑しみとは生命に張り付けられた機械的なものから生じる”と要約してよいならば、機



械的なものに対する生命の優越を前提にした、人間精神の、モノに対する優越感と解することができる。となると、ベルクソンに挑戦したはずのパニョルの優越感説もベルクソンの掌のうちに収まってしまおうのではないか。

この問題の背後、あるいは基底に、『道徳と宗教の二つの源線』に結実するベルクソンの、生の哲学にもとづく社会—人間学が想定できる。すなわち、機械が生命を制圧する近代社会、モノが精神を支配する近代文明に対するアンティテーゼとしての生の哲学が、機械に対抗する笑いの文化を復権するための支柱となる、という構図である。

これは、近代資本主義の物質・機械至上主義、それに照応する機械的自然観への反逆である。古典主義に対抗するロマン主義的反逆と照応するところもあるだろうが、より大きな西欧の文化史的文脈でみれば、プラトンのものへの批判ということにもなる。それをノーマン・ホランドは、「プラトン理論の修正である」と考えて次のように言う。

「ベルクソンは、静的なプラトンの理念を生を躍動する *elan vital* と置き換えたのである。ベルクソンにとって、喜劇的なものは、「人間の思慮深い適応性と生き生きとした柔軟性を見出そうとするところに姿を現わすある種の機械的な硬直性」となったのである（ホランド66『現代思想』1984. 2）。

これは、はたして単なる修正か、もしくは超克か、ことによると、根底的な対立か、議論の分かれるところであろう。カギになる論点は、〈自然〉概念の解釈如何であり、もう一つは、プラトニズムとキリスト教の生命観、靈魂観の関係にあるだろうが、検討は、次の機会に譲る。だがいずれも、笑いを肯定的に捉える点では、パニョルの「優越感説」とは相違するように思う。いずれにせよ、古代「異教」文化が笑いに対して、もともとおおらかであったことを考え合わせると、議論は錯綜したものとなるであろう<sup>4)</sup>。

## V 誰が 誰の何を笑うか

さて以上のようにみてみると、「微笑み説」でなく、「機械化説」でも、「優越感説」でもない、笑いの解説格がまだまだたくさんあり得ることが示唆される。これまでも、笑いという厄介な人間現象を、単一の理論で説明しつくすなどは、思い上がりであるというのが諸家の一致した見解であった。

そこで、あらためて、パニョルが回避、解消したはずの、〈誰が〉〈何を〉笑うか、という関係の構図を基に、笑う—笑われる関係の各論をつぶさに検討しなければならないだろう。それは言い換えれば、笑いの地域性、民族性、ジェンダー性 階級性 世代性等々を個別現象に即して、一つ一つ解釈を試みることから始めなければならないだろう。今回はわずかの事例分析にとどめざるを得ない。

話はどんどんややこしく、つまらなくなりつつある。笑いの理屈では笑えないことは先刻承知だが、ここで思い切った飛躍をして、前に、例外的と言及した笑える哲学の一端を紹介しよう。

「日本人初のお笑い哲学者と呼ぶにたる人物」と漫画作家の柴門ふみから紹介される土屋賢二には、『われ笑う、ゆえにわれあり』を初め、『われあり、ゆえにわれ笑う』、『われ思う、ゆえにわれ笑う』、『われ笑う、ゆえにわれ笑う』など、タイトルからすでに笑える著書が多数ある。たしかに読んで笑える、類まれな哲学者である。その土屋も「哲学と笑いの間には関連がある」と言い、「ウイトゲンシュタインによれば、「いかに生きるべきか」とか「わたしが存在しているのは何のためか」といった問題をはじめ、哲学的問題はすべて、言葉の使い方の規則に違反することから生じたものである。哲学の問題や主張も、ある見方をすれば、ナンセンス・ジョークのように可笑しいというのだ」（土屋、35）と述べる。

そして、「笑いの需要は大きい半面、笑いは軽視され、低俗とされる傾向がある」ことを指摘したのち、次のような推論と洞察を加える。

「このように軽薄の代表とされる笑いと深刻の代表とされる哲学が同根のものだという意見が出てくることをみても、笑いの底は意外に深いのではないかという疑念、あるいは、哲学の底は意外に浅いのではないかという疑念が生じてくる」（土屋、36）。

この種の言説は気取ったハイブローの笑いと、一部から見なされそうだが、それはともかく、話を戻すと、まず笑いの地域性である。東京で受けた笑いを大阪で披露したところ、誰も笑わなかった、という事例も少なくないらしい（高田文夫）。逆に、吉本喜劇を嫌悪する人が関東・東北出身者には多い。チャップリンの自伝によると、彼がアメリカ合衆国に渡った当初、イギリスで大笑いを取ったしぐさやギャグが笑ってもらえず当惑するエピソードもあ

る。イギリスのユーモアとフランスのエスプリ、ドイツの爆笑にズレが生ずるといふ話もよく聞く。

次はジェンダー問題に属するか。「箸が転んでもおかしい年ごろ」とあるように、思春期の少女たちは、集団になると実によく笑い転げる。男性である僕には理解しがたいこともしばしばあった。それはいったい、誰が誰の、何を笑っているのだろうか。男同士の集団ではどうだろうか。多数の男と少数の女、その逆の場合、「誰が」と「誰を・何を」の関係は違って来るだろうか。民族による違いもあるだろうか。比較文化論的研究のテーマである。

支配者と被支配者の関係、強者と弱者の関係のなかではどういふことが起こるのであろうか。

ヨーロッパの宮廷に道化は付き物であった。道化は、身分的にはもとより、身体的、精神的に劣等であると誰の目にも映るような形で登場する。服装をはじめ、大人なのに子供の背丈、低能にみえる反応の鈍さなどを宮廷人たちが嘲笑の対象とする。道化は被支配者であり、弱者であるが、これが一筋縄ではいかない存在である。今回は詳しく紹介する余裕がないが、英文学者の中橋一夫がかつて、「道化の運命」と称する論稿で、シェイクスピアの劇中の道化に三種のタイプを見出したのを思い出す。単に見下され笑われるドライフル、お偉方の中の少数者の隠された弱点を皮肉って多数者の優越の笑いを引き出すスライフル、笑っている宮廷人たちが実は、笑いにされているのに気づかないように、作者の悪意が仕組んだビターフル、という三類型であったと思う<sup>5)</sup>。

また、チャップリンの映画には、よれよれのフロックコートを着た小男の浮浪者が図体の大きい威張った警官の尻をけ飛ばす場面がよくあり、それを、現代では想像もできないほど大衆が喜んだという。

笑いの階級性や上下関係と対照的とも言えるのは、ラプレーが描く、民衆の共同体の笑いであろうか。それは、たとえキッカケを作る役割り主体が仕掛けられていたとしても、みんながみんなを笑い合う。つまり、参加者全員が自分たち自身を笑う、いわば友愛の笑いである。

もちろんこのほか、関係の分かり難い笑いもたくさんある。アニメ「風立ちぬ」の中に、昼夜兼行で作り上げた、いわゆる「ゼロ戦」戦闘機を、牛車に乗せてノロノロと飛行場に運んでゆく場面がある。

図表 2



図表 3



これは、早さのテクノロジーの先端を行く飛行機と、遅さの象徴でもある牛の歩みのアンバランスが可笑しいが、誰が誰を笑っているのだろうか。笑われているのは、ゼロ戦の設計者や、製造工員たちではあるまい。ちぐはぐな技術システムで戦争を起こした軍事指導者たちが批判されていることは間違いない。たしかに滑稽な状況ではある。ただ僕は素直に笑えず、むしろ無謀な戦争をせざるを得ないシステムのなかにいた日本人の惨めさを感じた。

次の漫画はどうか。

図表2の場合は、漫画と学校の宿題のミスマッチに可笑しさがあるが、そこに巻き込まれたサザエさんたち家族が笑われているともいえる。むしろ、カツオの機知に喝采を送る読者も少なくないだろう。両者をひっくるめて、現代の、メディアと教育の状況を作者が風刺していると解釈することもできる。

図表3は、宗教行事と子供の生理とのギャップが可笑しみとでも言える。経をよむ僧侶の表情にも可笑しみをさそわれるが、作者は仏教を諷刺しているのではあるまい。そういえば、犬が、野外放送などで流される音楽に反応して遠吠えするのと何か似通うところがある。いずれにしても、子供の行動に潜む不思議さとそれに戸惑う大人の姿がテーマをなしている。不条理は常に笑いの一つの要因である。

そういえば、村瀬 学の『子供の笑いはどう変わったか』という本も参照したいが、それを取り上げるのは、笑いと教育学と子供との関わりの文脈で、次の機会にゆずりたい<sup>6)</sup>。

## はじまりのおわり

「教育学は笑いと相性が悪い」のではないかと「はじまり」に書いた。そのわけを考えたいというのが本稿執筆の一つの動機であった。

もう一つの動機は、理解してもらい難いだろうが、教育と教育学にいま最も必要とされ、最も乏しいと私には思える、自然（ガイア～コスモス）への素直な畏敬の心情、他方での社会・文化への根底的批判精神、この、対立をはらむともいえる二つの教養、その結合を＜笑い＞が媒介できないだろうか、という課題である。笑いの生理は自然に根拠をもち、しかも優れて人間的現象である。しかも笑いに

は、ガイア＝コスモスと同化する側面と世界とヒトを仮借なく異化する、という矛盾するともいえる働きが潜んでいるように感じられたのである。

その意味で本稿は、このところ、細々ながら長年にわたって探究を続けている、自然に根拠をもつ教育目的論、その基盤になるはずの、個体発達と系統発生を関連付ける歴史哲学の模索の延長線上にある。とはいえ、歩みを進めるにつれ、前途は遠のくばかりである。探究の旅は、まだはじまりのはじまりである。

数年前に、『教育哲学研究』からの依頼を受けて「未来世代が生き延びるための＜大きな物語＞の挑戦—＜自然＞に根拠をもつ教育の歴史哲学の方へ—」という一文を寄稿した。その時の挫折感が以後の拙稿のすべてに影を落としている。

それ以来、終末論と復活信仰のまぶしさに圧倒されながらも、希望が見いだせないまま、自分と人類の、いわば公私の＜終末＞を笑いと共に迎える支度を整えるしかないという心境に陥りがちなことも確かである。ただそれも、ガイゲンフモールの響に倣うより、沈みゆくタイタニック号の中で最後まで演奏し続けるジャズバンドにあやかりたい。いやむしろ、自分の終焉を笑い飛ばす前近代日本の民衆のふてぶてしい知恵に敬意を払って、己れの精神を少しでも奮い立たせるささやかな努力を続けるべきか。

次回には、笑いの文化を比較文化史の文脈において考え、笑いにおける日本独自性と世界普遍性の問題を、そして、『子供の笑いはどう変わったか』などを糸口にして、もっと教育と教育学に近い場面で、笑いの文化の問題を考えたいと思っている。それでやっと、本論が始まりそうだ。

## 註

- 1) この方法の特徴は「顔の動きを顔と情動の結びつきから捉えるのではなく、顔と首の筋肉の動きにのみ注目」する点である。現在心理学の分野で最も広く使われている「顔の動きの記述法」とのことである（川上他、15）。
- 2) ちなみに、『聖書』のいわゆる外典の一つ『トマスによるイエスの幼児物語』には幼いイエスの笑いについて二度言及があり、その一つは「大笑い」であったことが紹介されている（宮田、74）。
- 3) ただしここ数十年来、メタフィジックスのフィジカル

- を求め続けているほくとしては、やはり笑いの自然的根拠を見出したい、しかも前に紹介したとおり、「ほほえみ」には進化論的背景があるではないか。
- 4) 古代の生の肯定性の延長上に近代の笑いもある。だが、関 曠野『プラトンと資本主義』は、マックス・ウェーバーの、ヘブライズム系譜の近代化論に対抗して、ヘレニズム・プラトニズム系譜論を対置する。そこでさらに、生の哲学者としての「ニーチェの笑い論」の位置づけが問題になるだろう（クンナス『笑うニーチェ』参照）。
- 5) ちなみに、弱者を笑うことがたてまえとしてタブー化してゆくのは、近代以降の平等思想と福祉文化の普及に呼応しているのではないか。
- 6) 堀内 守『教育と笑いの復興』は笑いをタイトルに掲げた、教育学としては類まれな書物である。但し、笑いそのものは論じられていない。硬直した教育学者の思考が暗に笑われている。ポストモダンの言説を、山口昌男に同調して、最初に本格的に活用した著者の面目を示す一書である。

## 参考・引用文献

- バフチーン、ミハイル（川端香男里訳）『フランソワ・ラブレの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』1980（原著1965）せりか書房
- ベルクソン、アンリ（林 達夫訳）『笑い』1938（原著1900）岩波文庫
- ベルクソン、アンリ（森口美津男訳）『道徳と宗教の二つの源泉』2003（原著1932）中央公論社
- コート、R.リチャード『笑いの神学』1992（原著1986）聖母の騎士社
- フロイト、ジグムンド（中岡成文他訳）『機知—その無意識との関係』2008（原著1905）岩波書店
- フロイト、ジグムンド（中山 元訳）『ドストエフスキーと父親殺し 不気味なもの』2011（原著1919,1927）光文社
- ジリボン、ジャン＝リュック（原 章二訳）『不気味な笑—フロイトとベルクソン』2010（原著2008）平凡社
- 後藤明生『笑いの方法』1990 徳武文庫
- 堀内 守『教育と笑いの復興』1985 玉川大学出版会
- ホイジンガ、ヨハン（高橋英夫訳）『ホモ・ルーデンス』1973（原著1938）中央公論社
- ハーレー、マシュー M. 他（片岡宏仁訳）『ヒトはなぜ笑うのか』2015（原著2011）勁草書房
- 川上清文 高井清子 川上文人『ヒトはなぜほほえむのか—進化と発達にさぐる微笑の起源』2012 新曜社
- 木村洋二『笑いの社会学』1983 世界思想社
- 木村洋二（編）『笑いを科学する—ユーモア・サイエンスへの招待』2010 新曜社
- クンナス、タルモ（杉田弘子訳）『笑うニーチェ』1986（原著1982）白水社
- コフマン、サラ（港道 隆他訳）『人はなぜ笑うのか？—フロイトと機知』1998（原著1986）人文書院
- 宮田光雄『キリスト教と笑い』岩波新書
- 宮下志朗『神をも騙す—中世・ルネッサンスの笑いとう文学』2011岩波書店
- 中村 明『笑いの技法辞典』2017 岩波書店
- 西村清和 松枝 到『笑う人間/笑いの現在』1994ポーラ文化研究所
- 菅阪直行『笑いの脳—社会脳へのアプローチ』2010 岩波書店
- パニョル、マルセル（鈴木力衛訳）『笑いについて』1953（原著1947）岩波書店
- 高田文夫『誰も書けなかった笑芸論』2017 講談社
- 土屋賢二『われ笑う、ゆえにわれあり』1994 文藝春秋
- 梅原 猛『笑いの構造—感情分析の試み』1972 角川書店
- ウォルター、チップ（梶山あゆみ訳）『この6つのおかげでヒトは進化した—つま先、親指、のど、笑い、涙、キス』2007（原著2006）早川書房
- 山口昌男『笑いと逸脱』1990 ちくま文庫